



日本記者クラブ
シリーズ企画「3. 11大震災」

現在の復旧・復興には
30年後、50年後の日本の姿が欠落している
赤坂憲雄 學習院大学教授

2013年2月18日

数百年、あるいは千年に一度かもしれない未曾有の大災害に遭遇した私たちは、歴史の評価に耐えられるだけの対応をしているのだろうか。その意識をわれわれはどれだけ持って東日本の復興を進めているのだろうか。誰よりも東北の歴史と風土を知り、人々の営みの裏に分け入っている赤坂憲雄さんは、復興の現実に深く憂いを抱いています。

「われわれが今ここで議論することは、30年後、50年後の日本というものをきちんと頭に描きながら議論がなされるべきだ」。東日本大震災復興構想会議での建築家、安藤忠雄さんの言葉は、赤坂さんにとって「天の啓示」ともいるべきものでした。50年後に日本の人口は8000万人にまで減るというのに、海岸に巨大な防潮堤を築くとうのはどういうことだろうか。大震災で人工のものはことごとく壊れました。その後に「干潟」が残っているのです。それは一体何を意味するのだろうか。被災地を歩きながら、赤坂さんはいろいろな思いにとらわれます。

原発事故で故郷を失った福島の人々の中で、新たな「差別」が生まれようとしています。被害に苦しむ人々の間で、「対立」と「分断」の歴史が始まろうとしています。それほど事態は深刻なのです。しかし、希望もあります。「自由民権運動」だと言って、立ち上がっている人たちがいます。東北の歴史は教えてくれます。勝てないが、負けない戦をしてきたのだと。それでは「赤坂さんの世界」に入ってみてください。

司会：橋本五郎 日本記者クラブ企画委員（読売新聞）

日本記者クラブ Youtube チャンネル
<http://www.youtube.com/watch?v=EbBx5LvlxVg>
◎公益社団法人 日本記者クラブ

30～50 年後を考えているか

司会：橋本五郎・企画委員（読売新聞） ただいまから赤坂憲雄先生の、「3.11」についてはもちろんそうなんですけれども、後半は、東北というは何だろうという話まで広げられればなと思っています。企画委員の橋本ですけれども、きょうは、赤坂さんがちょっと喉のぐあいが良くないうことで、講演というよりは、途中からトークみたいになると思うんですが、一通り終わつた後、皆さんからいろいろご質問をお引き受けしたいと思います。

間もなく大震災から 2 年がたとうとしていますけれども、被災地に対する気持ちがだんだん薄れていく。一方で復興はある程度軌道に乗っていく。しかし、軌道とはいっても正規の軌道なのか、相当ずれている軌道なのかというのは、相当これも問題がありまして、それについても実際に現地に足を踏み入れて、いわば「虫の目」で被災地の現状をつぶさに眺めておられる、そして、東北とは何かということをずうっと考えてこられて、それといま起きていることの大きなギャップみたいなものをおそらく強く感じておられると思うのですけれども、そういうものも含めて、これからいろいろお話を聞いていただこうと思います。

赤坂さんは、東日本大震災復興構想会議の委員でもありました。私もご一緒だったんですけれども、我々が言うこととはかなりレベルを異にするというか、全然違う発想で、赤坂さんが口を開くとみんながシーンとして聞くという場面が幾つもありました。ということで、いろんな思いをここで吐き出していただこう、そう思っています。

まず、赤坂さん、復興の現状というものを、宮城、岩手と福島は全く違うわけですけれども、これは別々でも結構ですが、一体それをどういうぐあいにごらんになっているのか、そこから始めていただきたいと思います。

赤坂憲雄・学習院大学教授 橋本さんとは復興構想会議で一緒にさせていただきました。結局、我々が議論できたのは実質 2 カ月半だったんですね。で、うやむやに復興構想会議は開店休業状態になって、11 月に招集されたときには「解散です」というふうに申し渡された。つまり、震災から間もない時期からほんの 2 カ月半の議論しかできなかつた、ということが僕にとってはとても悔いとして残っています。

つまり、国家のとても大事な、巨大な震災の後

の復興をどのようにしていくのかというそのために、我々が適切な人材であったかどうかは別にしまして、ああいう会議を招集しておいて、それを 2 カ月半で変えるという、そのあり方そのものが、僕は国の形というものを、長い視野の中で考えるということはできない我々の何か限界というか、そういうものをいま感じています。

その復興構想会議の中で、幾つも心に残っている言葉があります。延べにして 50～60 時間、我々は議論しました。最初のころは、あ、この人おもしろいな、と思って聞いていても、50～60 時間、内臓を吐き出すように議論をしていると、何だこの人この程度かみたいな、あるいは、この人、こんなことを言っていたのはそういう意味だったのかとか、そういう納得があるとか、いろいろありました。

その中で、僕の中に残っている言葉を 1 つ挙げると言わされたら、安藤忠雄さんが何度か言われた「我々がいまここで議論すること、それは 30 年後か 50 年後の日本というものをきちんと頭に描きながら議論がなされるべきだ」と言ったことです。そんなことは当たり前だろと言われるかもしれないのですけれども、民俗学者の僕自身にはそういう発想はありませんね。東北を歩いていても、「限界集落」という嫌な言葉がありますけれども、どんどん村は消えていく、そういうところを歩いていますから、30 年後の日本というのを考えるのは、結構つらい場面が多いのです。

そんなことで、安藤さんが言わされた言葉、30 年後の日本、50 年後の日本を思い描きながら、いま我々が何をなすべきかを考えるべきだ、というとても真っ当だと思います、真っ直ぐだと思いますが、その言葉が僕は一番心に残っています。

そして、それ以降、僕自身はその言葉を繰り返し繰り返し反芻しながら被災地を歩いてきました。けれども、おそらく最もいま被災地の復興とか復旧の現場で欠落しているのが、30 年後の日本、50 年後の日本を思い描きながら、そのためにはいま、どのような復興・復旧、そのシナリオが必要なのかという議論がほとんどないのではないか。

その後に勉強を始めてみると、いろいろな統計はすでに出ていたわけですけれども、50 年後の日本列島の人口は 8,000 万人台になると言われています。いま 1 億 3,000 万人弱。この日本列島から 50 年をかけて 5,000 万人の人口が減る。僕にとっては、そのイメージはかなり強烈でした。

明治の初めに 3,000 万人だった人口が 150 年を

かけて1億3,000万人になる。もうずうっと右肩上がりの時代だったんですね。3,000万人が4倍以上の人団になるというのは、途方もないことですよね。開発だって当然しなくてはいけない、日本中、至るところを水田にして、国民に飯を食わせなくてはいけない、当たり前だったと思います。でも、我々はおそらくその右肩上がりの人口の時代が確実に下がっていく、減少の時代に入っている。そのときに、では、いま何をするべきなのか。

例えば、海岸にいま巨大な防潮堤を建てるということで、公共事業が先行して進んでいます。けれども、8,000万人の人口を頭に描いたときに、いまの3.11のときの海岸線を守るということが果たしてリアリティーがあるのだろうか。高い防潮堤を建てれば、漁民は海がみえなくなって、相当厳しい状況に追い込まれます。観光といつても、どこへ行っても高い防潮堤しかない場所にだれが行くんだろうか。

そして、津波をかぶったその場所に、あらためてまた家をつくるという発想にはとてもなれない。つまり、いや応なしに高台移転というものを進めざるを得ない。にもかかわらず巨大な防潮堤を建てる。それは30年後、50年後の日本を思い描いたときに、何か違うんじゃないかな。そこに注ぎ込まれる10兆円、20兆円のお金、公共事業に注ぎ込まれるそのお金は、30年か50年後の日本列島に生きている人たちのために準備をする、使う、そういう発想をどこかできちんと繰り込まないと、我々は途方もない過ちを犯すのかもしれない、ということを痛切に感じ始めています。

そしてもう1つ、あるとき、ふと気がついたのです。2030年代に原発をどうするかという問い合わせ投げかけられました。僕はいま59歳です。20年後、30年後、自分が確実にこの世界に生きて存在するというふうには思えなくなっている。何が起こるかわからない。つまり、2030年、あるいは先ほどの言葉で言えば、30年か50年後の世界ということを思い描いている自分がもはや当事者ではないんだということを、そこで当事者ではない自分が未来のことを考えなくてはいけない、その引き裂かれた現実、当たり前なのかもしません。でも、僕自身も60という年齢を迎えようとしていて、安藤さんの言葉は、別の言葉に言いかえると、おまえが存在しないその世界について、おまえはどのような責任を持って思いめぐらすことができるのか、という問い合わせにもなっているような気がしています。

おそらくいま被災地で始まっている復旧・復興、そこによくも欠落しているのは、安藤さんの言わ

れたような、30年後、50年後の日本を誰も思い描いていない、そういう議論が起らぬといふことが決定的なのかなという気がしています。

潟の風景が突き付けるもの

司会 よく言われるんですけども、大震災以前と大震災以後、違うというのは、一体何が違うのか。ここは非常に表現が難しく、誤解されるおそれを感じながら思うことは、千年に一度のことがあって、そのときつくづく思ったのは、我々は自然を何か制御できるという勘違いがあったのではないか。もっと自然の脅威を畏怖しなければいけなかつた。それを巨大な堤防で防ごうというのは、これはやっぱ傲慢なことだったのではないか。

復興構想会議の提言の中にも、逃げようと書いてあります。その根底には、立ち向かってもかなわないならば、大震災を機に、私たちは自然とどう向き合うべきか。これは原発もそうなんですけれども、原発は人間がつくったものですけれども、人間がつくったものが自分たちに刃向かっていることに対してどう対峙するか。それと同じように、大自然の脅威に対して、我々は本当に打ち勝とうとすることがどうなのかということをそもそも我々に問いかけたのではないかというのが、私が最初に思ったことです。その関連から言えば、赤坂さんはどう受けとめられていますか。

赤坂 海岸線をずっと歩いていると、至るところに潟ができていたんですね。水浸しの泥の海が至るところに広がっていた。僕にとっては、それはとても衝撃的でした。話を聞いてみると、その下は水田だと言われるのです。

あるいは、陸前高田のあの洗われたところも、もともとは干潟なのです。潟なのです。この100年の時間の中で、海辺にあった潟、潟港といったものを埋め立てて、そこを水田にしたり町にしているところが見事に津波に洗われて、もとの100年、150年前の潟の風景に戻っているところがたくさんありました。厳しい被害を受けたところを調べてみると、ほとんどそうだと思います。潟とか、もともと海であったとか。

南三陸町の町が壊滅的な被害を受けていますけれども、あそこも調べてみると、17世紀半ばの慶長大地震、津波から50年ぐらいして、町割をつくって、山村部にいた次男、三男がおりてきてつくった町なんですね。何度も津波を受けながら、それでも人口が増えていきますから、その圧

力でどんどん海に出ていく。

標高 16mの高台に立って、指を差しながら教えていただいたんですけども、実はほとんどかつて海だった。その記憶がまだ生き残っているような新しい歴史なんです。人間たちがコンクリートで固めた境界を、自明の前提にしてはいけない。つまり、3.11 のときの境界が自明の前提ではない。それは人口が膨らんでいった時代の選択として、そこにつくられた境界なんだ。もう一度、我々が人と自然との境界というものをきちんと引き受ける、考える、そういうきっかけにしないと、同じことを繰り返すのかもしれない。

僕は潟を至るところでみていて、潟に返してやればいいんじゃないか、というふうにあるとき思うようになりました。潟というのは、かつては生物多様性の宝庫で、漁業が行われ、その潟の周囲には水田が広がっていて、風光明媚な観光地として栄える、そうした場所だったのです。それを、もう一度復活というか、その風景に戻してやるという選択があり得るのだという、その議論をしたいなと思いました。

とても象徴的でしたけれども、南相馬市の、まさに泥の海を前にして、いろんなことを伺ったんですけども、土地の人たちは、「浦に戻ってしまったよ」と言う。あるいは「江戸時代に帰っちゃったんだ」という言い方をする。そこで、明治の30年来からの埋め立て、開田によって生まれた田んぼを耕している人たちの年齢は、すでに70代半ばです。つまり、5年、10年かけて、そこが水田に公共事業として復旧されたとしても、そこを耕す人たちはおそらくいないです。耕す人たちがいない田んぼに復旧するということが果たしてリアリティーがあるのか、我々はそんなことをしている暇があるのか、という疑問が拭えなかったということがありますね。

司会 私も大震災直後に、地上からと、それから上空からずうっと低く飛んでもらってみましたけれども、はっきりしていることなんですね。それは、自然是残って、人工的なものがやられているんですね。それが極めて対照的だという感じで、そこから何を酌み取ったらいいかということをつくづく思い知らされました。

現実に赤坂さんは具体的にいろんなところを回って、そして、被災された人々は一体何を考えているのか、ということをずうつと思っておられたと思うんですけども、そのことについてご報告いただけますか。

阪神はモデルにならない

赤坂 復興構想会議でも、2~3回目に神戸の復興を担当された方たちにゲストに来ていただいてお話を伺いましたけれども、すぐにわかりましたよね、神戸はモデルにならない、はつきりそれがわかつてしまつた瞬間がありましたね。それも幾つかの背景があると僕は思います。

1つは、神戸の震災が起つたときは、まだ右肩上がりの余韻が残っていた。ですから、1.17のその前の町に、それをもっと合理的にして復旧するということが当たり前であった。だから、官僚主導型でかなり早く動いて、でも、いまになってみると、“復興災害”と言われていますけれども、大きな建物をつくっても、そこに住む人がいない。つまり、コミュニティを解体して巨大なビルをつくって、その中に入れといわれたけれども、結局だめだったとか、そういうことがあります。神戸の場合には、復旧がある意味では自明の前提だったと思うんですね。

ところが、東日本大震災は、復旧ということに対して、かなり最初の段階から、それは無理だよ、あの何百kmにもわたって、あれだけ壊滅的な被害を受けた、あのすべての村や町をもとに戻すなんていう経済力は我々にはない、ということが、言葉にはなかなかさせませんでしたけれども、ある意味では前提のようにあった気がしますね。

そして、実際にも、例えば防潮堤をつくるということで、宮城県あたりはかなり画一的につくろうとされています。しかし、現場では、例えば気仙沼のあたりでは、畠山重篤さんという「森や海の恋人」という言葉を広めてきたカキの養殖をされている方なんかは、そこに生まれてしまった干潟、それを守るほうがいい、つまり漁民にとっては、防潮堤というのは命をとられることに、新しい風景をつくっていくということにならない、ということをはつきり自覚されていて、かなり初期の段階から言われていましたよね。

上からの政治がやろうとしている復旧というものが、現場ではどんどんずれていっている。しかも、宮城と岩手も、あの会議の中でも大変対照的でしたね。

司会 うん、そうでしたね。

赤坂 宮城は石巻とか、割合遠洋漁業で栄えたところですから、漁業の規模が大きいんですね。ですから、産業化、商業化というシナリオもあり

なんだと僕は思っています。でも、岩手のほうは小さな漁村がたくさんあって、その中で伝統的なコミュニティを大事にしながら漁業をやってきたようなところが多いので、その復興のシナリオは全然違うということがみえてしまった。

もしかしたら選択を誤ったのかもしれないを感じているのは、あまりにも地域の条件が多様なので、そこに国家が上からのシナリオを押しつけるべきではない、というふうに我々は議論しましたね。ですから、その小さな市町村レベルの地域が、自分たちで将来へのシナリオというものを思い描いてつくっていくために、それを支えるような専門家とか官僚とかが支援に入る、というイメージを語りました。でも、どうもそれがうまくいかなかつた。逆に、我々は問題を先送りするというか、投げてしまったような結果になったのかもしれない。

もちろん、6月末に提言書を出してから議論の場が続いているれば、いくらでも修正はできたと思いますけれども、それができないままに、誰も提案するものがないままに、気がついてみると、官庁の縦割りの巨大な壁の中に巻き込まれていって、地域が、例えばこんなことをしたいということで専門家とか建築家とかみんな入ってつくっていったものを提案しようとすると、縦割りの壁の中ですたずたにされて、それがちっともプロジェクトとして成立できない。それが至るところに転がっているのが現実だと感じています。

司会 それぞれ違う条件、歴史があって、それを一律にやるということは非常に難しいことなんですねけれども、阪神との違いで決定的な違いは、私も秋田の過疎の村の生まれですから実感としてあるんですけども、阪神は都市がやられたので、みずから回復する力があるんです。東北は、そうではない。もう農業も自分の代でおしまい、漁業も細々とやってきている、そういうところがやられた。これは立ち上がりようのない打撃。そこを一体どうするのかということを考えたとき、これは1つは、やっぱり地元の人たちが基本的にその気にならないとだめだということですね。

いまどんな現実があるかということ、原発もそうですけれども、いろんな補償金が出る。1人当たり幾らと。そうすると、5人家族だと十分それで暮らしていくということがある。仮設住宅には、パチンコ屋の車が朝迎えに行く、夕方送っていくという。ここはいろんな補償はしなければいけない、いろんな制度を新しくつくらなければいけない

い、しかし、そのことによって失われていくものが随分あったり、ここは非常に難しいところなんですけれども、何かをやろうとする枠組みをついたときには、必ずそこからこぼれ落ちるのではなくて、それと全く正反対のことを行ってしまう。赤坂さんも現場でみておられると思うんです。復興庁も政府も何か間違ったことをやろうとしているわけではない、そのことが一番いいことだと思って、いろんな縦割りはあるにしても、不幸にしようと思ってやっているわけではないんでしょうけれども、目的と結果がどんどん離れていくという現実があるのではないかという気がしてならないんですね。

対立と分断を乗り越えよう

赤坂 僕は、特に1年間はひたすら被災地を、宮古からいわき市まで歩き続けて、そこで何が起こっているのかをみたいと思って歩いたんですね。この1年は、福島に拠点を定めて、その福島で起こっていることをとにかくみつめながら、いつの間にか社団法人を2つ作り、「ふくしま会議」という民間の草の根の運動体のようなものを作り、いろんなことを始めました。

僕も、官僚の方たち、大変優秀な方たちだし、悪意があるなんて全く思っていないんですけども、でも、これまでの枠組みの中で、いま起こっている出来事、震災後の状況というものを超えることは大変難しい。

例えば、僕は2011年4月30日に、福島県を「自然エネルギー特区」にしようという構想を提案したんですね。我々の提言書の中にもかなりそれがきちんと盛り込まれました。けれども、動き出してみると、さっぱり始まらないんですね。

つまり、県のレベルでも、自然エネルギー、再生可能エネルギーって何なのか、それを進めていくことがどういうことなのか、ということがあまりよくわからない。わかっていない。そもそも忙し過ぎるといったことがあるんですけども、でも、例えば特区としてどのように東北の被災地を育していくのか、「復興特区」という構想も随分議論したんですよね。でも、いつの間にか消えてしまって、どこにも特区というのは生まれていないんじゃないですか、「復興特区」という形では。

つまり、これまでの枠組みとか、そうした制度的な条件をほどいて、総力戦で向かわなくては突破できないものが、もう本当に小さな現場でそれともできない。例えば、風力、結局ほとんど条件は緩和されていない。いまだに風車1つ建て

ようというのに「4~5 年かかる」と言われるんですね。それでは特区も何もないですよね。

一番楽なメガソーラーというのが進んでいますけれども、メガソーラーは、地域にとってほとんど意味がないと僕は思っています。地域が地産地消型のエネルギーを育てながら、自治とか自立のためにそのエネルギーの問題を組みかえていく、といったことが実はできない。そういうできない仕組みの中で言葉だけが踊っていますけれども、何も進んでいない、動いていないという現状がありますね。

例えば、僕はいま飯館村の復興計画を策定する会議の委員長を仰せつかって引き受けているんですけれども、その中で、比較的汚染が低い、福島から来たときの入り口のあたりに、何とか新しい村の復興の拠点をつくれないかという議論をしてきました。農地なんですね。当然その農地の縛りをほどいて、そこを新しい村にするといったことが行われるんだろうと思って議論をしてきたんですけども、県のお役人の方から、「そこは農地だから、相当難しいと思います」。だって、ほかに汚染の線量が高くて住むところがなくて、わずかに低いところがあるから、そこをきちんと除染をして、そこに新しい村をつくっていくための拠点をつくろうというのに、「農地だからできません」、そういうことをまだ言っているんですかね。

そうしたら、もう何のビジョンもつくれない。たぶん高台移転が進まないことにもその問題はあるんだろうと思うんですけども、高台移転だけではなくて、福島ではすでにカジノ町とか、いろんなことが提案されていますけれども、進まない理由の1つに、やはり古い制度的な縛りがあつて、この期に及んでまだそれが生きている。

特区にしろという議論すらなくなつて、この厳しい状況の中で新しい自分たちの地域を再建していくのか、その思いとか問い合わせたものをつぶすような——でも、それは、きっと別に悪意ではないんですよ。悪意なら、まだ鬱いやすいんですけども——そういうものが当たり前に転がっていて、もう言い出したら切りがないくらい、唚然とするようなことが転がっていますね。

そのうえに、橋本さんが言われましたけれども、とりわけ福島の分断状況というのは、たぶん東京からは全くみえないと思います。例えば、もう、あいつは原発から何kmなのか、家が 25 kmだ。20 キロ圏内の人とは完全に違うわけですね。補償はどのくらいもらっているか、もらっていないか、

みんな知っているわけですね。そうすると、何かを発言するときに、ああ、あついは 20 何キロだ、みたいなことがわかっている。だから、唇寒いんですね。発言できない。言葉を発した途端に巨大な何かみえない悪意のようなものが——誰がというのではないんですけども——憎悪とか悪意が取り巻いてしまう。本当に福島の分断状況というのはすさまじいものがあります。

例えば、一番わかりやすいのは、小さな子どもを抱えたお母さんたちが、避難をするか、とどまるか、どちらを選ぶかという選択を迫られたわけですね。避難された方たちもいる。とどまつた方たちもいる。でも、そのお母さんたちのグループがののしり合いなんです。お互いに非難をし合う。僕は、その対立、分断状況をみていて、子どもがかわいそうだなと思いますね。子どもは選んでいないんです。母親たちの不安と憎悪というものが状況を途方もないところまで追い詰めている。でも、お母さんたちが悪いんじゃないんですよね。

どのような線量であれば安全か、避難したほうがいいのか、わからないじゃないですか。2年間、いろんな専門家と勉強会もしてきましたけれども、結局わからない。20mSv であれば安全だとか、曖昧に飛び交っていますけれども、でも、僕は、それを決めた人たちが福島の現実をわかっているとは、とても思えないんです。

例えば、その専門家たちは、20 mSv だと 0.38 μ Sv/h ぐらいなんですよ、相当高いですよ、そんなところで安全だとおっしゃるならば、ぜひお孫さんでも連れて、1カ月ぐらい、その状況の中で青空会議でもやって、「ほら、安全ですよ」と言ってほしいですね。たぶん、福島の人たちはそれを知っていますよ。20mSv は安全だなんて言っているけれども、安全なわけがないだろうと。

そして、いま帰村ということもどんどん進められようとしていますけれども、もう誰も信じられない、誰を信じていいのかわからないという状況の中で、しかも、そこに賠償の問題とか補償の問題というのが、小さなメッセージをかけるように分断されていますから、隣にいる人が本当は何を考えているのかわからない、というような疑心暗鬼の状態がどんどん広まっていますね。

僕は「ふくしま会議」というのを 2011 年 11 月 11 日にやったんですけども、そのとき、発言してくださる方は、最初ほとんどいませんでした。でも、最初にマイクを握った、仮設に避難している、ある高齢の方が、もう本当にぶるぶる震えながらしゃべってくれたんですね。そこから堰を切

ったように、そこにいらっしゃっていた福島の人たちが声を上げ始めたんですけども、そのときに、お互いが意見も思いも違うんですよ、でも、その意見の違いを超えて耳を傾けるということができただけで、その会議が終わったときに、もう拍手が終わらなかったんですよ。そのくらい唇が寒い、そういう状況の中で分断されて、放置されている。

先ほどのお母さんの話に戻りますけれども、お母さんたちが分断され、対立し合っていて、でも、どちらも被害者じゃないですか。どうして被害者同士がいがみ合い、ののしり合って、それが放置されているのか。それこそおかしい。どちらも被害者だ、どちらの子どもたちも我々はきちんと支援をしなくてはいけないんじゃないかという当たり前のことが声としてなかなか出てこなかつた、僕はもう、この2年間、この福島では「分断と対立を超えよう」、それしか言ってこなかつたですね。

もう小さな正義がばっこしていて、自分の正義は正しいんですね。もう1つの別の正義は正しくない。でも、僕の知っている、県に勤めている方は、小さな赤ちゃんがいるんですけども、避難していないんです。なぜか。家を建てたばかりなんです。そこには、動かすことができない介護が必要な老人がいる、そういう状況の中で、避難ができない。避難すべきなのか、どうしたらいいのかわからない。そういうそれぞれの条件を抱えて、かろうじて、仕方なく選んでいる選択というのが憎しみを生んでしまう状況というのは、これはとにかく超えてなくてはいけない。僕はそのためだけいろんなことをやってきたような気がしますね。

「風力」と「野鳥」が同じ土俵に

司会 原発は特にそうですけれども、一体専門家というのは何なんだという、こういうときこそ専門家であることが十分發揮されなければいけないのに、どこに、何が権威があるのかさっぱりわからない。何かみんな、ある意味では権威あるものにすがろうと思っているんだけれども、どこにも権威がないという、それがさらにまた分断を生んでいる。確信なき専門家の不在、それは難しいからだということはあるんでしょうけれども、では、そういうことで原発を今までやってきたのかと、痛切にそう思うんですね。

さっきのお役所の話、農地だから難しいというのは、まさにそうであって、ここがやっぱりスピ

ードが要求されるゆえんであって、私たちも構想会議の提言を出した後、立て続けにいろんな提言をすべきだと、何で早くやらないのかということを徹底的に要求すべきだと何度も提言もしたんですけども、議長が動かなかつた。何もしないまま完全に風化して、だんだんやる気をなくしてしまう。もしあのときに、どんどん「じゃ、あの件はどうなっているんだ」とやっていれば、特区だって可能だったんですよね。

そこは僕らも誤ったんですけども、特区はやはりある種の希望の象徴みたいなところがあつた。小さい穴だけれども、そこをあけていくと何か違うものがみえてくるかもしれないということだったんだけれども、なかなか現実はそうはいかなかつた。

そういう中で、しかし、絶望ばかりもしていられないということで、この2年間で、ある意味では、赤坂さんにとって、大震災後の、ここにある種の希望があったというか、そういう観点で言えば、どんなことが挙げられますか。

赤坂 東北とは何か、東北人とは何かということにもつながっていくと思うんですね。東北って、負けっ放しなんですね。戊辰戦争でももちろん負けましたけれども、歴史が始まって以来「蝦夷（えみし）」と呼ばれた人たちも常にやられてきた。自分が侵略者になったことはないにも関わらず、常に大和の勢力によって戦争を仕掛けられて、しかも、敗北をしてきた。それは別の言葉で言うと、勝てないんですけども、負けない戦いをするることは知っているんですね。僕はそれを感じました。

ですから、福島でも、本当に厳しい状況の中で草の根の動きが至るところで始まっています。それは、僕にとっては希望でしたね。

例えば、震災から4ヶ月後の7月20日に、喜多方という会津の町で、我々は、僕が提案して、福島から自然エネルギーへの転換を進めようといったシンポジウムをやりました。そのときに、200人くらい集まつたんですね。会津は原発の影響をあまり受けなかったので、会津から何ができるかということを考えたいという人たちが集まっていたんですけども、もうそれどころではない状況の中で、福島の人たちは追い詰められていたわけですが、その7月20日のシンポジウムは熱気にあふれていました。

そして、とってもおもしろかったのは、1つは、終わって帰っていく女性、複数でした、我々のほ

うにちょっと近寄って、「これって自由民権運動よね」というふうに、70代の女性が我々に共感のエールを送ってくれました。至るところで、それ以降は、これって自由民権運動かもしれない、エネルギーという問題に、そこでは収斂されていますけれども、本当はもっと広く、地域は自治と自立というものをもう一度取り返すために、この原発事故によって傷ついた福島の人たちがそこから何とか立ち上がるということをお互いに語り始めている。

とても象徴的な言い方をしますけれども、エネルギーということをテーマにする、それだけではなくて、いろんな人たちが、それ以前には決して出会わなかつたような人たちが1つの場に集まって議論をするということが随分増えたんですけれども、その中で、僕にとってはとてもおもしろかったのは、風力を進めてきた人たちと野鳥の会が同じ土俵に上がつたんです。これは犬猿の仲なんですよ。もうお互いが正義であつて、絶対相入れない。でも、僕は、小さな土俵ですけれども、同じ土俵に上がって議論を始めるのをみたときに、あ、変わらなと思いました。

つまり、犬猿の仲でいられたのは、ある意味では、原発という巨大なエネルギーを生産する仕組みがそこにあって、エネルギーをつくってくれていたから、その問題は横に置いておいて、風車と野鳥の会は延々とけんかをしていることができた。でも、違うよね。例えば、福島は早い時期に脱原発を選択して宣言したんですけども、だとしたら、じゃ、どうしたらいいのか。そのときに、風車と野鳥の会が小さな正義をかざしてけんかをしていてもしようがない、どこかで折り合いをつけなければ先に進めない、ということが誰の目にもみえてしまった瞬間がありました。

そして、ある小さな集まりの中で、私は子どもたちのお産のことをやっています、私は山の風力基地をつくるのに反対していますとか、野生動物の保護をやっていますとか、種々雑多な人たちが集まって、その人たちが言っていることを大きな紙にマジックで書いていったんです。みんなでてんでんばらばらなことを言って、向かう方向も違っていると感じながら書いていて、ふと議論が煮詰まったときに、その紙をみていたら、何かがみえてきたんです。

つまり、原発というものをブラックボックスのようにして、原発と我々が共存できないのであれば、ここに出てきているものがみんな折り合いをつけて新しい社会をデザインするために動き始めるしかない。そこには原発の「げ」の字もない

んですけども、どうも原発に依存しない社会へ行こうというふうに決めたその瞬間に、そっぽを向いていた者がお互いに折り合いをつけて、ある将来の社会のデザインに向けて動き出すのかもしれない、ということを感じた瞬間がありました。僕は、それが福島の希望だなというふうに感じました。それなしには、福島の人たちが福島の地で生きていくことができない、そういう追い詰められた状況だからこそ、もしかしたらここから新しい日本社会のデザインが始まるとも思いました。

僕は繰り返し、「福島がはじまりの土地になる」というふうに、震災から10日目ぐらいに書いたエッセイの中でも書いていたんです。でも、それが、もしかしたら本当に福島がはじまりの土地になるかれしないということを、この1年、2年を福島で感じ始めていますね。

司会 復興に当たって、事情は宮城、岩手、みんな違うんですけども、ただ、現実にどうやって暮らしていくのか。いろんな雇用の場も必要だし。そうすると、まずそのところを抜きにして昔に戻そうとしたって無理な話。そうすると、一体何から——いまも復興しているんですけども、一体何を突破口にすればいいのか、東北とは何かということの関連の中で、その点についてはどうですか。

勝てないが負けない東北

赤坂 さっきも言ったんですけども、東北人というのは、勝つことはほとんどないんですよね。でも、負けない戦いをしたたかにやることはできる。たぶん、そういう動きが岩手でも宮城でもいろんな形で始まっていると思います。

そして、地震と津波だけであれば、おそらく東北人は連帯して、かなり見事な復興・再生に向けて動いたと思います。繰り返し津波の被害を受けていますし、単なる人と自然との関係の中で起こっている出来事であれば、相当復元力というか、再生力というのを持っていると思います。

ところが、そこに原発の事故が重なったために、分断されたんですね。岩手・宮城と福島が分断されて、しかも、東北は外からみるとまた一括りで、関東以南と分断されて、そういうことが至るところで起こったんですけども、にもかかわらず、僕が最近思っているのは、再生可能エネルギー特区を福島で始めようとして、福島で我々は小さな電力会社をつくろうとか、実際にいま始めていますけれども、東北全域をフィールドにした再生可

能エネルギー特区みたいなものができないだろうか。そういう提案があつてもいいんじやないか。むしろそれのほうがリアリティーがあるかもしれない。

つまり、風の状況は太平洋側と日本海側は違いますから、季節ごとに風況のいい時期も違う。太陽光のいいところもいろいろある。地熱もある。潮力もある。そういういろんな小さな再生可能エネルギーをトータルに管理していく。そのためには、やっぱり東北ぐらいのエリアは必要かな。そのエリアをコントロールして、そういう技術は確実に我々は持っていますから、例えば、あらためて東北一円を再生可能エネルギーの特区として、さまざまな企業を誘致するとか、そういうことをできるようにすれば、僕は、相当進むと思います。

そして、東北の暮らしというもの、生業というものをどういうふうに再生していくのかということに、僕は日本社会がこれから向かおうとしている方向性というものを示すことができるのではないか、というふうに考え始めました。

ですから、潟に戻すとか、何で妄想みたいなことを言っているの、と言われるけれども、実はそれがむしろリアルになりつつあるということを引き受けていけば、東北から新しい暮らしや生業のスタイル、人と自然との関係といったものもつくっていくことができるかもしれない。

ただし、福島は、繰り返しますが、大変厳しい状況に追い込まれている。そこで起こっていることをきちんと視野におさめていかないとだめだ。

例えば、僕は最近、警戒区域に少しずつ入って、文化財の状況とかを調査したりしているんですけども、もう至るところ、田んぼや畑がセイタカアワダチソウによって覆われています。人間たちが管理していた場所というのは、1年、2年で一斉に野生の自然に戻ろうとするんですね。森はあまり変わりません。でも、田畠はものすごい勢いで変わっています。そして、皆さんももちろんメディアの方たちですからご存じだと思いますけれども、警戒区域ではイノブタが大繁殖しています。イノシシとブタが交配するんですね。イノブタなんですね。家畜のブタよりも3~4倍の繁殖力があると言われています。そこで何が起こっているのか。僕は、とても重要なことが起こっていると思います。

Chernobyl も、実は野生の王国になつたんですね。福島にも野生の王国が生まれている。しかも、その王国は汚れている。そこにいる獣たちも当然、汚染物質を体内に取り込んでいますから、

汚れている。つまり、汚れた野生の王国がそこに生まれている。しかも、それは警戒区域だ何だという人間のつくったラインなんて関係なく、どんどんはみ出している。このことの意味というのは、例えば、山形で漁師たちが「最近、何か野生動物が多いな」と言って仕留めて、「これは食っていいのかな」と。つまり、彼らはすでに野生の世界というのが大きく変容を始めていることを身をもって知っているんですね。だから、それは食つていいものかどうかとか、おそらくそれはどんどん広がっていくと思います。

イノブタも、栃木あたり、千葉あたりでとまっていたんですけども、ここで始まってしまった動きというのは、おそらくもっと巨大な動きで始まつていく。つまり、野生の王国ということは、考えただけでも、すでに我々の足元では途方もないことが起こっていて、人と自然との関係というのは、もう途方もないエネルギーで変容を始めている。

ですから、日本列島の中に人が数十年単位で入ることができない、そういう空間を持ってしまったということは、実は途方もないことであつて、それは東北ではとどまらない動きとして広まつていかざるを得ないんだということ、それをきちんと引き受ける覚悟があるのか、といった問いも僕は感じます。

にもかかわらず、そこで生きていこうとする福島の人々がいる限り、僕は寄り添う。何ができるのか、諦めないというふうに思つて、いろんなことを、小さな草の根の動きを始めています。

再生可能エネルギーの先進地に

司会 私から最後なんですけれども、再生可能エネルギーを考えるときに、大きな流れとしては私も賛成なんですけれども、ただ、復興構想会議でもありました、被災地の海岸を太陽光パネルで敷き詰めるという案もありましたね。私はギョッとしました。それが東北地方の光景なのか。私は、風力についてもいさか疑問がある。というのは、私のところの秋田もそうですけれども、ずっと海岸に風車があるんですね。それを今度、ダーツと海岸線をやろうとするわけですよ。これが人の住む風景なのか。私は非常に疑問です。

それだけではなくて、弱い電波を発するとか、鳥が——さっきの野鳥の会とのそういう問題ということとは別に、そういうのが人間の住まいなんだろかというね。そうすると、エネルギー問題も、それはもう少し私たちが住む場所は一体ど

ういうところなのかというのも少しごらいは考えなければいけないのではないか。

ですから、再生エネルギーに対して、手放しで、やることについては、ちょっと待てよ、という気にもなるんですね。この太陽光パネルで敷き詰めるという、これはどうですか。私はどうも疑問ですね。

赤坂 確かに、あの提案があったときには、みんなぞつとしましたよね。僕が思い描いているのは、エネルギーの仕組みというものを小さくしていく、地産地消型のイメージなんですよ。ですから、メガソーラーといって企業を誘致して喜んでいますけれども、あれは何の意味もない。地域にはほんのわずかな税金しか落ちないんですね。

僕は、地域の景観とか農林業といったものときちんと折り合いをつけながら、地域が主役になって選んでいく。例えば会津なんかでも、小水力をやろうかというふうに声を上げたよそ者の若者たちがむしろ旗をつくって我々の前にあらわれたときに笑ったんですけども、でも、彼らの情熱に支えられるようにして、いつの間にか、会津で電力会社をつくろう。小水力から地熱から、水力とか、いろんなものが実は可能性としてある。ベストミックスなんですよ、地域にとって。巨大な風力やメガソーラーを誘致して、というのは解決策にならない。でも、自分たちが小さな地域で使う電力は、自分たちで賄うような、そういう仕組みをつくっていこう、それが大きく日本社会のおそらく産業構造も変えていく。

だから、いま、再生可能エネルギー、ほんの1~2%でしょう。この期に及んでというか、やっぱりそれはおかしいですよ。つまり、自分たちの将来を考えたとき、選択肢を広げておく。たくさんの中の選択肢をリスク管理といったところからも広げておくというのは当たり前の選択だと思うんですけども、まだそれが始まらない。原発をとめているから、火力で膨大なガスや石油を使っているという、その問題の立て方は、何も選ばないんだなという……。

だから、最初の問い合わせに戻りますけれども、30年後、50年後の社会というものを考えたときに、僕は、原発は無理だと思います。放射性廃棄物ということを考えただけでも、それを再生することも処理することもできないということはみてしまっているし、ウランだって有限なわけじゃないですか。石油が枯渇するといっていますけれども、ウランだって続かないわけですよ。だとした

ら、選択肢を少しずつ広げるために、可能性を追い求めていく。

再生可能エネルギーも随分研究が進んでいますから、風車も巨大な風車ではなく、円筒形とか、いろんなものがいま模索されているんです。そうした再生可能エネルギーの先進地に日本がなっていけば、ものすごい輸出産業としても栄えるだろうし、日本の技術力というものは生かされると思います。

確かに、メガソーラーを津波の被災地に全部並べたら、これだけできるとか言わされたときには、ちょっとのけぞりましたけれども、でも、そういう極端なイメージを議論のネタにして、あるべき姿というものを模索していけばいいんじゃないかなと僕は思っていますけれども。

司会 はい、わかりました。それでは、会場の皆さんから、いろいろご意見、ご質問、おありでしょうか、どうぞ挙手をしてください。

赤坂さんはこういう感じで、しっとりと言われると、なかなか強い口調で物を言えない、これが赤坂流なんです。そういうことにめげずに、どうぞ、ご質問してください。

質問 なかなかおもしろい話だったんですけども、基本的に言うと、津波、特に原発の特殊性みたいなものと、例えば過去の経済成長の中で農村が崩壊していきますよね。基本的に崩壊の中で、原発とか、あるいは企業誘致をやって、これでみんな大体農村は崩壊していくんですよね。

だから、今度の災害で復興という場合、さっき若干興味があったのは、自由民権運動みたいな、地方の政治運動にいっているかどうかは知りませんけれども、そういう形のものがないと、結局同じことなんですよ。

特区でもいいんですけども、中央から金を引っ張ってきて、それで食えますかと。当然それがなくなれば終わりですねと。それから、例えばメガソーラーもいいんですけども、風景という話は若干違うと私は思うんだけども、風景なんて、自然からみれば都会の風景のほうがよっぽど異常ですね。

だから、問題は、地域が自立して食って、共同体がもう一回できるかどうかというところだと思いますよ。

先生はいろいろ回っていらっしゃる。かなり具体的に東北地方の若い人たちが集まって、政治

運動まで持っていかないとダメだと思うんですけれども、そういう震災を契機に、日本のいままでの社会を変えていくような、そういう動きというというか、息吹というか、そういうのはどうなんですか。

赤坂 議論としては、確実に始まっていますね。政治に背を向けていては動かない。若い世代から、例えば市町村の議会に入っていって、確かに動き出してみると、若い議員さんたちがいろんなところで活躍しています、活動しています。僕が言っているのは、福島のことですけどね。

そういう意味では、政治への参加も新しい形で始まっているのかもしれない。僕らは周りの若い人たちに、「そんな文句ばっかり言っているんだったら、村の政治の中に入ったほうがいいよ。入りなよ。そこで君らが鍛えられていかなかつたら、次の社会なんてデザインできないんだから」という、そういう会話がもうすでに当たり前に行われるようになっていますね。

我々自身は別に政治運動をやっているつもりはないんですけども、結果として、新しい東北から暮らしや生業のスタイルをつくっていこう、小さな地域のエネルギーの自立を図ろうとかいうときには、きっと政治になるんだろうなという予感はあります。確かに若い人たちが当たり前にそういう議論を始めています。

「除染」をどう考えるか

質問 除染について、お伺いしたいと思います。もちろん線量の低い市街地なんかでは、一刻も早く除染をして、安心して住めるような環境をつくるなければいけないというふうには、それは思うんですけども、一方で、林野も含めて、山林も含めて除染をするとなると、本当にこれは莫大な費用がかかりますし、どのぐらい効果が出るのかどうかも自信がないと。

ただ、一方で、先ほど先生がおっしゃられたように、汚れた野生というような問題もあるので、これは非常に重い問題だと思うんですけども、除染はどこまで、どの程度進めるべきなのか、先生のお考えをお聞かせください。

赤坂 これは、答え、とても難しいですよね。福島でも、この問題の議論を始めた途端に、もうののしり合いの場面になります。何が正しいのか、どのレベルであれば安心であり、安全であるのかということがわからないわけですよ。その状況の

中で議論は錯綜し、そしていま、その除染というのがゼネコンへの丸投げの形で行われている。もう現場では祈るような気持ちで、除染をしてほしいんですよ。戻れるなら戻りたいというふうに思っている人たちが、その除染の現場をみているときに、絶望するんですよ。

朝日のスクープから始まりましたけれども、現場では、つまり下請の下請とか、そういうレベルだと思いますけれども、どのレベルまで除染しなくてはいけないという目標値がないんです。ただマニュアルに従ってやっているだけで、そして、モニタリングポストのある場所を、みんな知っていますけれども、その周りだけ徹底して除染をしているわけですよ。そしてあたかも下がったかのような幻想、そして、除染をしてもらったけれども、数ヵ月で戻ってしまったとか、そういう現実を1つ1つ突きつけられることによって、かなり除染というものに対する期待とか信頼というのは落ちてきている。やっぱりそうだったのかという諦めもあるし、怒りもある。じゃ、どうしたらいいのかということが、つまり除染ありきで帰村を進めようとしてきた人たちは、いま相当打撃を受けていると思いますね。

ただ、僕自身は、何度も繰り返しますけれども、僕が選ぶのではなくて、何かを選んだ福島の人たちに可能な限り寄り添うことだけを考えたいんですね。ですから、こうだああだというふうにとても決めつけることはできないし、そういう意味で、とても曖昧な物言いしかできないんですけども、空気としては、そんなに巨大な予算をつけて、果たして除染は可能なのか、もしかしたら可能ではないのかもしれない、という空気が広まりつつあるのかなと。これは僕の勝手な感想です。

福島の人たちがどういうふうに考えていらっしゃるのかわかりませんし、たぶんそれを、福島はこうだとか言える人は一人もいないと思います。その場所で、立場で、もう声が割れてしまっていると思います。

司会 その関連で、玄侑宗久さんは、いま、除染に対する疑問は、それでちゃんと除染できるかどうかではなくて、除染しなくてもいいところまで除染しているんじゃないかという、むしろそういう疑問ですよね。

赤坂 僕は玄侑さんとはまた立場が違います。

司会 そうなんですね。それが一体どうなのか。

だって、福島よりもずっと高いレベルのところが、ほかのところにあるじゃないか、という話し方もされている。そうすると、ある意味では、壮大なる無駄をやって、そして、その結果、戻れないということをしているのではないのか。

そうすると、一体そういう問題を私たちはどう考えたらいいのかという、これはなかなか難しいですね。

福島における差別の問題

質問 私、福島県の出身なんです。福島といつても入り口のほう、白河というところなんですが、大震災が発生した後、それまであまり田舎に帰ることはなかったんですが、やっぱり心配になって、しばしば帰っています。兄弟もいるし、両親の墓もあるし、非常に沈鬱ですね。でも、帰るたびに、ああ、参ったなという思いがしているんです。つまり、人口は減るし、風評被害で農産物は売れない。田舎を離れて初めてわかったんですが、福島は農産県なんですね。それが売れなくなってきたている。

田舎の甥などの話を聞いたりすると、先ほど先生が30年、50年という話をしましたけれども、生まれてきた子どもが将来まともな結婚ができるのか、差別がないのか、放射能汚染の福島の人とは結婚できない、そういうふうに言われてしまうおそれがあるんじゃないかな、ということを非常に心配している。これは言わないです。言わないけれども、我々にはそういう風評被害、差別の状況が今後何十年続くのか、それを一番心配していますね。

復興も非常に重要ですけれども、そういう精神的な障害ですか、それをどうやって我々日本人が共有していくのか。

大震災直後に、京都で岩手のたいまつが拒否されたと。あるいは、愛知県で福島の花火が拒否されたと。みんな放射能。その気持ちは、おそらくなかなか消えないと思うんですね。

先ほど、誰も専門家がいないという話をしましたけれども、そういう人間の根本的な差別的な心理、それを我々、日本のマスコミといったらいいのか、専門家集団が長期的に除去していくということは非常に重要なんじゃないかな。

暗いという気持ちは、大体差別なんですね。それをもとにしているんです。何か工場がいっぱい出てきて、あるいは発電所ができて、地元にお金が落ちたということだけではなさそうな感じがするんですね。そういう精神的な問題も含めた日

本全体の取り組みというのは、田舎に帰るたびに痛切に感じるんです。私はもうそういう力はありませんけれども、ぜひそういう面でも、先ほど福島だけがちょっと別な次元だと言っておられましたけれども、私もそう思います。それをぜひ日本全体で救うというのか、「寄り添う」とおっしゃいまして、非常にいい言葉だと思います。そういう雰囲気を、30年、50年、ぜひ高めていっていただきたいということをお願いしたいというふうに思います。

赤坂 風評被害の問題というのは、とても厳しいものがあって、ちょっと橋本さんが言われましたけれども、福島に閉じ込めておきたいという、本当は問題はもっと大きく広がっているにも関わらず、福島に閉じ込めておきたい、あるいは白河の闇で分断したいという欲望はたぶん大きく働いているんじゃないかなと思いますね。

僕が「福島民報」に書いた「風評被害と戦うために」というエッセーがものすごい非難を浴びたんです。差別の問題として、僕自身はそのころからすでに、いまおっしゃられたように、若い女性たちが結婚できないんじゃないか、結婚差別を受けるのではないかと。男たちはあまり実感していないんですけども、女性たちはまさにそこに不安の根っこを見出している。子どものために戸籍を変えなくてはいけないと思っています、と30代の若い聰明な女性から言われたときに、これはとんでもないなと思いました。

そして、そのときに僕が思ったのは、子どもたちの未来のために、未来の子どもたちのために、何ができるかということだけを考えるしかないんだというふうに思いました。我々は、きっと当事者ではないんです。そのことをきちんと肝に銘じたいなと思いました。

そして、その問題と向かい合う中で、広島や長崎、水俣、何だか構造的に同じだな、同じところに入り込んでいるんだなというふうに思いながら、ちょうど僕が自分の大学で卒論の面倒をみていた一人の女子学生が福島出身で、「この差別と汚れの問題をやりたい」というふうに言ってきたので、僕はそれを応援して、1年間、卒論の面倒をみたんですけども、彼女はそれを書いて、本当は東京で就職する予定だったのに、福島に帰るというふうに言って、帰ることを選びました。福島の企業を選んでいるんですね。

僕らの周りでは、あえて福島をもう一度選び取ろうとする人たち、例えばアーティストの中でも、

東京にいたんですけども福島に戻りたい、福島のこの状況の中で自分の表現というものを突き詰めてみたい、といった人たちが少しずつあらわれていますね。僕はやっぱりその人たちを支えなくてはいけないし、応援しなくてはいけない。放っておけば、この混乱状態の中で、福島は Chernobyl 型的な場所に追い詰められていくだろうと思います。でも、何とかそれをさせない。そうではない、もっと希望のある場所にできるはずだ。

それは、自然・再生可能エネルギーというと、すぐに企業だ、雇用だとなるんですけども、僕はもう少し違うことを考えていまして、ドイツのシェーナウという村がやったことがまさにそうだったんですけども、原発を拒んで自分たちで電力会社をつくってしまう。そのときに彼らが掲げたのは、子どもたちの未来のために、いま自分がそういう選択をしなくてはいけない。

エネルギーというのは、別に企業とかに限定された問題ではなくて、僕はそこから地域の自治とか自立といったものが育っていく、そういうよりどころなんだ、そういう育て方をしたいと思って

やっています。

状況は本当に厳しいと思いますけれども、でも、繰り返しますが、東北人は負けない戦いは知っている。それを執念深く続けたいな、というふうに思っています。

ちなみに僕の父は東白河の鮫川村の出身です。

司会 時間になったようです。きょうは、ただ単に復興がどうこうではなくて、少しオーバーかもしれないけれども、もっと根源的なところを論じていただこう、そう思ってお話しいただきました。本当にありがとうございました。

先ほど、2年たとうとしている被災地の大きな希望、それは草の根ということなんだということをおっしゃっていましたけれども、揮毫は「草の根」とお書きいただきました。

赤坂 ありがとうございました。

(文責・編集部)